



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴史家 しらこまひとみ 白駒妃登美

それもそのはず、お母さんが人間愛に溢れた素敵な女性だったのです。天保五（一八三四）年、諭吉は中津藩（大分県）の下級藩士・福澤百助と妻・於順の二男として、藩の蔵屋敷があった大阪で生まれました。ところが、二歳の時に父が他界。母子六人は故郷の中津に戻りましたが、大黒柱を失った福

＊諭吉を育てた母の愛情

福澤諭吉が一万円札の肖像になったのは、昭和五十九（一九八四）年。以来三十年以上も日本経済を支えてきました（笑）。慶應義塾大学の創立者にして、明治初期、日本人の八人に一人が読んだとされる、大ベストセラー『学問のすゝめ』の著者。輝かしい業績に気後れしそうですが、さまざまなエピソードから浮かび上がる諭吉の人物は温かく、人間味に溢れています。

人の上に人をつくらず

——福澤諭吉を育んだ人間愛

澤家は極貧の暮らしを余儀なくされます。内気な諭吉は、下士身分を卑下して外に遊びに行きたがらず、家の中で過ごしてばかり。それだけに、母・於順と過ごす時間が長かったのです。

＊人として当たり前なこと

近所にチエという娘がいました。家もなく親もないチエは、いつも着物はボロボロで、髪もボサボサ。そんなチエを於順だけは拒まず、いつも庭先で頭のシラミを何十匹も取ってやり、さらに握り飯を作ってあげたそうです。その際、シラミを小石でつぶすのが諭吉の役でしたが、諭吉はそれがイヤで仕方ありません。

ある日、いつものようにチエが庭先に座りました。母がシラミ取りを手伝わそうと声をかけると、諭吉はどうとう……



於順 福澤諭吉の母。中津藩（大分県）の橋本家から福澤百助に嫁ぐ。（生没年不詳） 父は漢学塾を開いた学者。

【イメージイラスト】アオジマイコ